

# 契丹陶磁の「周縁性」に関する検討（３） －遼代の都城・州県城制度との関連から－

町田 吉隆\*

## Examining on the Border Character of the Kitai Pottery in China(3) : To relate with the City Systems in the Liao Dynasty

Yoshitaka MACHIDA

### ABSTRACT

We are able to find out an archaic style in the Kitai(契丹) Pottery. These styles are similar to the pottery in the Tang(唐) Dynasty rather than the pottery in the Northern Song(北宋) Dynasty of the same era (A.D.10-12c). In other words, the style of the Kitai pottery is the border character. This paper will survey in the ruins of the Liao(遼) Dynasty(Khitans) Metro City as well as the state, the county seat in Liaoning or Inner Mongolia, there were variety of ceramics and tiles. It has been reported that corresponds to the city to the kiln of ceramics and tiles. But these combined forms are not so simple. We will need to understand the actual usage of producing ceramics and tiles in the Liao Dynasty(Khitans).

*Keywords* : pottery, Kitai(契丹), Liao Dynasty(遼朝), China, history

### 1. はじめに

10世紀初めから12世紀初めにかけて華北の一部を含む北東アジアから内陸アジアにまたがる領域を支配した契丹国（遼朝，以下，契丹国と表記）の陶磁器のうち，その領域内で生産された陶磁器を，ここでは「契丹陶磁」と規定する。

契丹国の陶磁器には古風な特徴があることが指摘されている。それは10世紀から12世紀にかけて生産されたものであるにもかかわらず，むしろ唐代の陶磁器に類似しており，同時代の北宋時代の陶磁器とは異なる様式であることを意味する。そして，それはしばしば中心文化が地方へと波及する時差により遅れることを意味する「周縁性」として説明されてきた。<sup>(1)(2)</sup>

この論考では前稿を受けて，契丹国の都城や州県城と窯業遺跡の関係について検討を行い，契丹陶磁を生産していた陶磁器窯が都城や州県城の需要にどのように応えていたかに注目して，その「周縁性」の多義的な側面を考察する。

\*一般科教授

### 2. 契丹国の都城と州県城

契丹国には以下の「五京」が置かれていた。

- ①上京臨潢府（内蒙古自治区赤峰市巴林左旗）
- ②東京遼陽府（遼寧省遼陽市）
- ③中京大定府（内蒙古自治区赤峰市寧城）
- ④南京析津府（北京市）
- ⑤西京大同府（山西省大同市）

また，各地に州県城として城郭を有する都市が建設された。その中には陵墓に奉祀し，守護する機能を持つ奉陵邑とよばれる都市もあった。

10世紀以降，草原と森林が混在していたこの地域に多くの都市が現れることは，中国における唐宋変革とも関連する北東アジアにおける歴史的劃期として注目されてきた。<sup>(3)</sup>

一方，複都制は唐朝や渤海国にも見られた。この制度は契丹国と同時代の北宋も採用していた制度であるから，複都制そのものを以て，契丹国が前時代の制度を継承・残存させていた「周縁性」とみなすことはできないし，複数の都城が同時代の北東アジアに現れた

ことが、当該地域の経済構造に変化をもたらしたはずである。

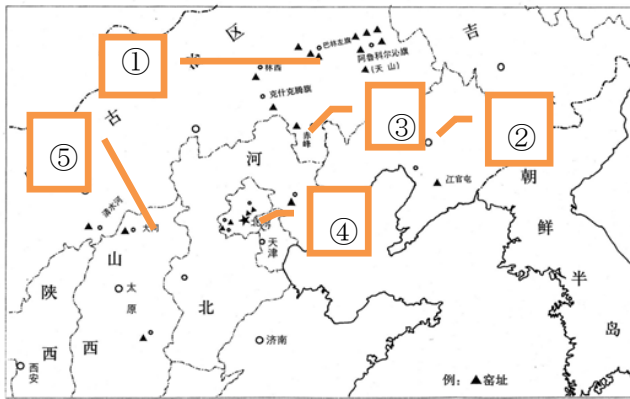


図1. 契丹国の「五京」と陶磁器窯址<sup>(4)</sup>

また契丹国における都城制、州県城制度には固有の特色が見られ、唐や北宋のそれとは異なる様相を示す。

まず第一に、建国の地に築かれた①上京臨潢府および③中京大定府以外の都城は、新たに編入した領域に設けられた都市である。②東京遼陽府は渤海国を滅ぼした後、一時的に形成された衛星国家の東丹国を編入した故地に置かれた。④南京析津府および⑤西京大同府は後晋より割譲を受けた、いわゆる「燕雲十六州」である燕州（現在の北京市）、雲州（現在の大同市）に設けられた。諸地方を統治するだけでなく、北宋と国境をはさんで対峙する要衝であった。自ずから各々の都城としての機能には相違が存在した。たとえば、①上京臨潢府の南方、シラムレン川支流の上流に設置された③中京大定府は都城プランが①上京臨潢府とは異なり、1004年の「澶淵の盟約」以降、頻繁に契丹国と北宋の間を往来するようになった外交儀礼の場としての役割を強め、契丹国の後半期には事実上の首都となった<sup>(5)</sup>。

それに関連して、第二には時代による都城そのもの変化がある。①上京臨潢府に代わり、③中京大定府の政治的役割が大きくなったことと同様に、当初は「南京幽都府」と名付けられた④南京析津府は人口も増え、経済的な要衝としての役割を強めた。後に金朝の中都、元朝の大都を経て、17世紀以降、現在まで継続する中国の首都「北京」の原型は契丹国時代に形成された<sup>(6)</sup>。つまり、同時代の北宋において、首都・「汴京」開封の地位が不動であったこととは大きく異なっていた。

第三には、北宋だけでなく、唐朝や渤海国とも異なる契丹国独自の制度としての「捺鉢（ナポ）」があげられる。遊牧民であった契丹人を支配者としていた契丹国では、皇帝は常に都城の宮廷において政務を執ったわけではなく、季節ごとに、移動を繰り返しており、大臣や役人の一部を含む政府も移動を繰り返していた。つまり、特定の都城に恒常的に政府たる「官」が存在していたわけではなかった。

以上のような特色を有する複都制に加え、契丹国の都市たる「州県城」には数多くの漢人や渤海人が移住させられ、また漢人やウイグル人の商人が各地に自ら移住していた。この徙民政策が契丹陶磁をはじめとする窯業など契丹国の経済活動に大きな影響を与えたことについては前稿でも触れたが<sup>(4)</sup>、唐朝時代の都市や北宋における「鎮市」などの経済的都市とは異なる性格を、契丹国の「州県城」に持たせることになったと考えられる。

### 3. 契丹国の都城と陶磁器窯

契丹国の陶磁器窯に関する調査、研究は20世紀前半に日本人研究者によって始められた。当時、現地で調査に当たった小山富士夫、黒田源次、田村實造、三上次男など各氏の研究からは今なお酌み取るべき情報が多い。20世紀後半から現在に至るまで、日本で形成されてきた契丹国の陶磁器窯に関する言説はそれらの情報を根幹として形成されてきた。

たとえば、三上次男氏は以下のように都城と陶磁器窯を結びつけている<sup>(7)</sup>。

- ①上京臨潢府（内蒙古自治区赤峰市巴林左旗）
  - 上京・城内窯（林東鎮の南約1.5km遼上京遺跡）
  - 南山窯（林東鎮南西、約1km丘陵上）
  - 白音戈勒（バインゴル）窯（林東鎮西約2.5km）
- ②東京遼陽府（遼寧省遼陽市）
  - 江官屯窯（遼陽市の東30km）
  - 大官屯窯（撫順市）
- ③中京大定府（内蒙古自治区赤峰市寧城）
  - 缸瓦窯（赤峰市の西70km赤峰市松山区）
- ④南京析津府（北京市）
  - 龍泉務窯（北京市門頭溝区）
- ⑤西京大同府（山西省大同市）
  - 大同青磁窯（大同市）
  - 渾源窯（渾源市介荘）

このように契丹国の陶磁器窯の立地を「五京」との関係から説明する記述は、第2次世界大戦後、中国で現地研究者による調査・研究が進むようになった過程でも見られる<sup>(8)</sup>。そこでは上京・城内窯、缸瓦窯、龍泉務窯を契丹国の「官窯」と規定している。

ただし、現地研究者による調査・研究が進むにつれ、「五京」と陶磁器窯をそのまま結びつける解釈では説明が難しい事例も見られるようになった。

たとえば、先に「官窯」と規定された上京・城内窯は契丹国晩期の陶磁器窯とされており、中にはこれを金朝治下の臨潢府で活動していた陶磁器窯と見る研究者もある。上京・城内窯を契丹国の陶磁器窯の中で、重く見てきた日本人研究者とは異なる見解である。

現在の遼寧省にあった江官屯窯、大官屯窯も、遡っても契丹国晩期、主には金代以降に陶磁器を焼成していた陶磁器窯との認識が、中国では主流となっている。

つまり、契丹国中枢の東半を占めた現在の遼寧省地域には契丹国時代に活動していた陶磁器窯が存在しなかったことになるわけであり、「五京」の成立と陶磁器窯の間には、少なくとも一対一で結ぶことができるような単純な関係は見られなかったことになる。

もっとも、現地研究者による陶磁器窯の本格的な発掘調査は近年まで数少なく、「官窯」と規定された陶磁器窯のうち、詳細な発掘調査報告がなされているのは、現時点では北京市の龍泉務窯だけである。各陶磁器窯での調査報告が待たれるところであるが、そもそも「都城」とその付近に立地していた陶磁器窯にはどのような関係があったのか、という問題はよく検討し直す必要があろう。

彭善国氏は近年、上京臨潢府付近にあった南山窯と白音戈勒（バインゴル）窯の踏査を行っている。発掘調査に基づく報告ではないものの、上京に隣接して設置された2つの陶磁器窯に関する最も詳細な報告である<sup>(9)</sup>。

それによれば、南山窯は林東鎮の南西側約1kmにあたる窯址は遼上京遺址内の南西部に位置する南塔がある丘陵の北西に位置している。

白化粧土を施した白釉が多く、緑釉、黄緑釉、醬釉などの碗の破片が主な残存遺物である。このような特色は過去にも報告されているが、陶磁器片と共に見いだされる窯具は三叉形窯具であるという。

一方、林東鎮の西約2.5kmに位置する白音戈勒（バインゴル）窯の窯址では鶏腿瓶（牛腿瓶）、卷唇罐、帯系罐など黒褐釉の陶磁器片が多く見られる。そして、ここでは“工”字形窯具が用いられていた。

生産活動を行っていた期間については、白音戈勒（バインゴル）窯の方が早く、10世紀から。南山窯は11世紀前半からと推測されている。

上京臨潢府の周辺にあった陶磁器窯はそれぞれ別のタイプの陶磁器を、異なる窯具を用いて生産していたことになる。おそらく2つの陶磁器窯の窯場では別系統の陶工集団がおり、各々は生産の面でも特化した陶磁器を焼成していた。現時点では遼上京の城内窯の実態は判明していないことが多いが、その規模が小さかったことは間違いない。つまり、遼上京の需要に応えた陶磁器窯はいずれも小規模であった。

契丹国の都城がそれぞれ近隣に特定の陶磁器窯を持ち、都城に必要とされる陶磁器を供給していたというイメージとは異なる状況が上京臨潢府にはあった。宋代以降の中国に現れる複数の窯場を持ち、大規模に焼成を行った定窯や磁州窯、龍泉窯などとは異なる、系統を異にする陶工たちが小規模の個性的な陶磁器を作っていた姿がそこにはあった。これを「周縁性」と呼

ぶかどうかはともかく、そのしくみを検討する必要があるだろう。

#### 4. 契丹国の「官窯」

契丹国の葬墓や遺跡から底部分に「官」という文字を刻印した陶磁器が出土することはよく知られている。また缸瓦窯からは「官」字を器面に刻印されている窯具も出土している。

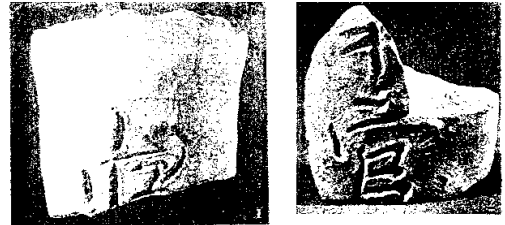


図2. 缸瓦窯出土「官」「新官」字印刻窯具<sup>(10)</sup>

馮永謙氏はこれらの「官」字が刻印される陶磁器や窯具を網羅的に集成した論考を発表している<sup>(10)</sup>。

その概要を記すと、

- ・「官」「新官」字が刻印される陶磁器はすべて白釉の陶磁器であること。
- ・最も早くに現れるのは晩唐、五代の10世紀前半であり、現在の河北省にあった定窯であること。
- ・契丹国出土の陶磁器においても「官」「新官」の刻印は10世紀より現れ、次第にその数は減少し後期になると見られなくなること。
- ・定窯と缸瓦窯の陶磁器に刻印された「官」「新官」の字体から両者を判別することは難しく、葬墓出土の陶磁器がどちらで生産されたものか判断する場合も、刻印字体での判別はできないこと。

以上から馮永謙氏は契丹国初期に定窯の工人集団が契丹国の缸瓦窯に連れて来られて、あるいは集団が移住して缸瓦窯そのものを開いたと推定されている。また「官」字が刻印された陶磁器には優品がおおいことから、これらが宮廷や支配層に用いられたことを指摘している。いずれも首肯すべき推論である。

ここでは契丹国の陶磁器窯の性格を検証する視点から、「官」字刻印の陶磁器について考察してみる。

缸瓦窯が契丹国建国当初から支配層に陶磁器を供給する役割を担っていたことは間違いないが、缸瓦窯では白釉の陶磁器以外にも三彩を含む低火度鉛釉陶磁器を焼成していた。これらには「官」字が刻印された事例は見られない。また缸瓦窯では定窯と異なり、おそらくはカオリンを含む磁土が得られなかったためであるが、白化粧土を施した白釉の陶磁器を焼成しているが、このタイプの陶磁器は北京市の龍泉務窯も含め、契丹国の陶磁器窯で契丹国後期に至るまで生産されているが、これにも「官」字刻印が付された事例が見られない。

つまり、缸瓦窯で生産されたと考えられる陶磁器のうち、「官」字刻印が付されるのは、宮廷に貢納された高級の白釉陶磁器のみであった。これは10世紀の定窯においても同様であったわけで、「官」「新官」は貢納品に対する一種の標識であって、定窯や缸瓦窯を五代諸王朝や契丹国が直接に管理、経営していたわけではなかった。この場合、南宋以降の「官窯」、特に元代以降の景德鎮窯の「御器廠」などのシステムとしての「官窯」とは区別しなければならない。

その一方で、缸瓦窯の成立過程は契丹国の陶磁器窯と契丹国の国家制度の関係について、1つの示唆を与える。先述したように契丹国では徙民政策により、各種の技術者が各都城や州県に集められ、文字通り、都市経営が行われていた。

筆者は2011年に内蒙古自治区巴林右旗で慶陵の奉陵邑であった慶州郊外で陶磁器窯を見学することができた。崩壊が進んではいたが直径5m前後の饅頭窯であることが確認できた。



図3. 崩落した窯室から見た窯口（2011年筆者撮影）

同様の州県に付随した饅頭窯はモンゴル国ボルガン県のチントルゴイ城郭都市址でも発掘調査が行われている<sup>(11)</sup>。都城、州県などの付近数kmに陶磁器窯が設置されるという点では上京臨潢府における南山窯および白音戈勒（バインゴル）窯と同じであり、契丹国の遺跡では都城、州県など城郭都市に付随する小規模の陶磁器窯址の組み合わせはかなり普遍的に見られる。

缸瓦窯や龍泉務窯はこれらの付随した陶磁器窯が発展したものと推測できるが、都市経営のために設けら

れた各地の陶磁器窯が契丹国の「官窯」であったと考えられる。

## 5. むすびにかえて

今後の課題をあげて、むすびにかえる。

- ・各都城、州県に付随していた契丹国の陶磁器窯の生産の実態を明らかにすること。
  - ・契丹国の陶磁器窯およびそこで生産された契丹陶磁には異なる窯業技術が含まれるが、そこに従事していた陶工集団の性格を明らかにすること。
- 別稿で検討することとしたい。

## 謝辞

本研究の一部は平成24年度神戸高専共同研究費（一般研究）により進められました。ここに謝意を表します。

## 註

- (1) 町田吉隆「契丹陶磁の「周縁性」に関する検討－唾壺と陶枕を例に」神戸高専紀要(48), 2010, pp.161-166.
- (2) 小川裕充「遼・西夏の絵画 総論」『世界美術大全集 東洋編5 五代・北宋・遼・西夏』1998, p.125.
- (3) 高橋学而「中国東北地方に於ける遼代州県一その平面構造・規模を中心として」『東アジアの考古と歴史－岡崎敬先生退官記念論集－』上, 同朋舎, 1987.
- (4) 町田吉隆「契丹国（遼朝）の陶磁窯とその特色」町田吉隆編『契丹陶磁－遼代陶磁の資料と研究－』朋友書店 2008, pp.6-11.
- (5) 武田和哉「契丹国（遼朝）の宮都に関する基礎的考察」『条里制・古代都市研究』21, 2006, pp.78-132.
- (6) 陳高華「遼代的燕京」『元大都上都研究』中国人民大学出版社, 2009, pp.7-13.
- (7) 三上次男「渤海・遼の陶磁」『世界陶磁全集 13 遼・金・元』小学館, 1981, pp.143-169.
- (8) 閻万章, 郭文宣「遼的陶瓷」中国珪酸盐学会編『中国陶瓷史』文物出版社 1982, pp.314-317.
- (9) 彭善国「内蒙古巴林左旗白音高洛, 南山窯址的調査」『草原文物』2011年2期.
- (10) 馮永謙「《官》和《新官》字款瓷器之研究」『中国古代窯址調査発掘報告集』文物出版社, 1984, pp.393-407.
- (11) 千田嘉博「モンゴル遼代城郭都市の構造と環境変動－モンゴル国チントルゴイ遺跡 2009年調査報告」奈良大学『総合研究所所報』19, 2011. 臼杵勲「契丹の地域土器生産」『札幌学院大学人文学会紀要』91, 2012.